

2. マクグラスと自然神学構想

前期の講義では、「近代的知」という問題連関において、現代神学における自然神学構想の意味を、マクグラスの次のテキストをもとに検討する。

Alister E. McGrath, *The Open Secret. A New Vision for Natural Theology*, Blackwell, 2008.

(なお、これは、今年度中に翻訳し出版予定。)

A. マクグラスの自然神学構想

テキストの概要・第1章：序論—自然神学をいかに論じるのか— (pp.1-20) より

(1) 自然神学の再構築をめざして

1. ヘブライ語聖書からの引用（詩編 19.1,8.3-4、イザヤ 55.9）、自然神学の聖書的可能性
「自然（天）」「自然の秩序」を通して神について何かを知りうる

2. 広義の自然神学（日常的な経験世界と超越的実在との間の連関についての体系的な探究）と、自然神学への関与が今日妨げられている理由

↓

この本の意図：

自然神学へのキリスト教特有のアプローチの仕方を展開すること

過去のアプローチの回復と再定式化、より安定した知的基盤を与える

自然が超越的なものを開示するとは：自然をある特別な仕方で「見る」「読む」こと
(ギリシャ的?)

↑ 形而上学

「自然学→自然科学」

↓ 科学技術

(2) 啓蒙主義的自然神学を超えて

3. 自然神学には多くのスタイルがある、アプローチの仕方の多様性

啓蒙主義・理性の時代の及ぼした影響

宗教的信念や前提へとまったく訴えることなしに神の現実存在が論証できるとの主張、自然観察から直接論証する

4. 本書は啓蒙主義的アプローチに対立する。

キリスト教的自然神学はキリスト教特有の神学的基盤に根拠付けられ特徴付けられる。自然のキリスト教的理解は自然神学の知的要件である。

特殊と普遍という問題

実行可能な事柄 ✓ ↓ 目指すべき事柄

学の歴史性 → 学としての必要要件

時間性：Heidegger, In-der-Welt-Sein

学の営み自体の時間性

被投性に制約された人間の企投

学の非学問的基盤としての決断性

(3) キリスト教と自然

キリスト教は「自然的なもの」の再定義を引き起こす。

キリストの出来事、受肉論は、自然的なものの範疇を修復し、新しい見方を可能にする

る。実行可能な自然神学は、自然的なキリスト教神学(a natural Christian theology)である(キリスト教信仰の規範的観念によって形成され可能となった)。神一般ではなく、キリスト教信仰の神。

5. キリスト教的識別(事物をキリストに照らして見る)という考え

「心を新たにして自分を変えていただき」(ローマ 12.2)

理解の仕方と存在の仕方(生き方)における徹底的な変革

6. 事物を新たに見、解釈する。

世界が、日常的経験の領域を超えてその究極的な創造者キリストを指示するものと見られるようになる。(見る、指示—開示)

7. キリスト教自然神学とは、自然を特別な仕方で見ることである。

自然は、正当的で権威づけられた、制約された、神的なもの(神の真理、美、善)への指示者である。

神の存在証明、純粹理性に基づく超越的領域といった問題ではない

(4) 本書は三部構成になる。

- ・第一部：超越的なものに対する永続的な人間の関心についての考察、世俗時代にも存続、永続的な意義と価値があると考えられるものとの出会うことによって、現世的存在を超える試みを行う際の方法と技術を叙述

↓

知覚の心理学についての現在の理解に対応 (人間存在の宗教性)

- ・第二部：超越的なものへの人類一般の探求ではなく、実在についてのキリスト教的ヴィジョン(三位一体的受肉的な存在論に基づく)に照らして構成された自然との関与としての自然神学

自然神学的な試みの歴史的起源と概念的な欠陥の詳細な探究

- ・第三部：感覚・知覚形成の企てとしての自然神学概念から、その課題と可能性のより広く豊かなヴィジョンへ。

自然神学への合理主義的アプローチではなく、自然と人間との出会いのすべての局面(合理的、想像的、道徳的)を包括するものと考える。

(5) 「自然」は曖昧な概念である。

8. 20世紀の自然神学理解、オルストンの定義

「いかなる宗教的信念でもなく、それを仮定もしない諸前提から出発して、宗教的信念を裏付けようとする企て」

増大しつつあった啓蒙主義の影響がキリスト教神学にもたらした圧力

自然や理性といった公共的に受容され普遍的に接近可能な基準に基づいて、中核的信念を論証すること

(近代神学の問題状況)

9. 「理性の時代」において「自然」という用語の意味は自明であった。合理的に明確に規定された存在。

自然宗教という概念形成

18 世紀の状況において、「自然」へ訴える広範な試みの基礎を理解するのは容易である。

啓蒙主義の著述家：

啓蒙的知識の確実で普遍的な基盤、純粹で汚染されていない源泉

キリスト教護教家：

聖書の信頼性に対する公然の懐疑の高まりに対処するために、自然に訴える
近代科学（新科学）はどちらの側でも利用可能
知的世界の最有力なレトリックとしての科学

10. 自然という概念は流動的である。自明であるどころか。多様な解釈を許す。「自然」は本質的に構成された概念である。解釈と評価の過程（社会状況、既存の関心・利害、権力と地位を持つ人々の隠された意図によって影響される）の結果。

自然とは知的に可塑的な概念である。自然の定義は、自然自体よりもむしろそれを定義する人々について多くを教えてくれる。

（6）自然神学は経験的な学科である。

11. 自然神学にアプローチする上で、哲学的神学的反省は重要であるが、経験的問いを避けることは出来ない。 バーの議論から引用。

自然一般と、人間本性の問題。神についての意識・気づきの能力をいかに探究するか。

数学的方法（理論の定式化）は不可欠であるが、しかし、経験的事実（実験、観察）が与えられなければならない。

神のついでに気づきの能力は、アプリアリなものか？

カント的な問題（心理学ではなく超越論）は自覚されているか？

↓

12. 組織神学あるいは形而上学の問題であると同時に、人間の心理学的な問い。

啓蒙主義的な伝統では従来：観察者である人間が自然を特権的な位置から客観的に読むことができる。

・現代の心理学：知覚は知覚形成という具体化され状況に置かれた活動。観察が行われる心理学的過程。「客観性」は自明ではない。

・観察者は受動的な観客ではなく、自然界の能動的解釈者である。人間が能動的に現実のヴィジョンを構築する。

↓

・批判的実在論の立場での認識論 cf. 社会的構成主義者の立場

表象し解釈する観察者の構成的役割+外部の実在との関わりによる強制

事物を理解しようとする人間の試みは事物が現実存在するあり方によって形作られる

（7）キリスト教的な自然神学はキリスト教の神に関わる。

13. 啓蒙以降も存続する超越的なものへの文化的な関心、西欧文化の矛盾、聖なるものへの回帰 ↓

自然神学をこうした一般的な文化的文脈に位置付けること（ポストモダン）

14. 自然を通じた超絶的なものへの探究はキリスト教の神に至るか？

超絶的なものへの探究は一つの神や複数の神々についての信念を必ずしも含意しない。

15. 現在の研究で採用されているには、自然神学へのキリスト教特有のアプローチである。

自然神学をキリストの出来事にしっかり結びつける。

ナザレのイエスの生と死に歴史的な位置付けられ、教会によって神学的に解釈された。

中心的主張は、キリストの出来事はすべての神学を「自然的」にする。キリストの出来事において、自然的秩序は贖われるのだから。

(8) 自然神学は受肉論的であり、二元論的ではない。

16. 多くの自然神学へのアプローチは二元論的であり、思弁的なヘレニズム哲学の影響によって、西洋の神学的伝統に深く染みついている。しかし、キリスト教的自然神学は二元論を必ずしも前提する必要はない。自然と超自然は二つの分離した世界としてではなく、同じ実在の異なった表現として考えられうる。

17. キリスト教の受肉論は二分法の再考を求める。自然の新しい理解。

ギリシャ教父：創造・受肉・贖いは、「自然的」なものの範疇全体を変革する

(9) 共鳴、論証ではなく：自然神学と経験的適応。

18. 弁証学は世界観と観察との共鳴に根拠づけられる。経験的適合、複雑で多面的な現象の最善の説明

・ホーキングホーンの4つの基準：経済性、視野、優美さ（簡潔さ）、多産さ

有神論は自然主義よりも強力な説明的道具であり、三位一体論的有神論は有神論一般よりも優れている

・これは証明ではなく、最善の説明である。自然は多様な解釈に開かれている。証拠による非決定性。自然神学へのアプローチは、観察と理論との共鳴を通して自然は現在の神への信念へと促すと考える。（ヒック、宇宙の両義性）

↓

自然神学がもたらすのは自然についての経験の知的理解だけではなく、自然の想像的で美的な自己化を深めることを可能にする。

（倫理的実践的な意義、この方向への議論は弱い）

(10) 知覚形成を超えて：善、真、美。

19. キリスト教神学が持っていた豊かさは、啓蒙主義などの影響で損なわれほとんど断絶状態に陥り、プロテスタントはその内部ではより広い文化的関心へ非共感的になった。本書で提案された自然神学へのアプローチは現代の文化的対話の内で神学する新しい可能性を提供する。

20. 最近の自然科学とキリスト教神学との対話の加速化

<マクグラスの自然神学構想のポイント>

1. 自然神学とは
 - ①キリスト教的自然神学
 - 1) 聖書的前提 2) 古代ギリシャの自然学
 - ②広義の自然神学
人間存在の宗教性
人間存在に本質的に構造化された宗教的仕組み（志向性）
 - ①と②との関係はどのように考えられているのか？
2. 自然神学の歴史性
 - ・啓蒙主義の意義、それがもたらしたもの ・啓蒙的近代からポスト近代へ
3. 自然神学の方法の問題
 - ・見る・解釈する、指示する → 言語論的議論へ
 - ↓
 - 知覚の心理学、脳神経科学
4. 自然神学の意義
 - ・公共性、学際性：弁証的意義
 - ・人間存在の変革：倫理的実践的意義
5. 思想史研究者マクグラス
 - ・マクグラスの議論の強み
博学な思想史的知識を整理した仕方で提示する
視野・問題関心の広さと着実さ
 - ↓
 - 何が問題であり、その議論の歴史的基盤はどこにあるか、という点の明晰さ
議論の出発点として安心して依拠できる
啓蒙主義の問題性
 - ・弱点：哲学的な議論の展開が不足している
近代のカント以降の哲学的議論、とくに解釈学的哲学が提出した問題
がやや不足している。批判的實在論もそれ自体として、どれほどの議論
がなされているのか。
実践的なテーマの取り扱いが希薄

B. 第三部 真理、美、善

——自然神学の革新のための基本方針(agenda)

第九章 真理、美、善

——自然神学構想を拡張する（＝第三部の序）

(1) 第三部の目的・意図

1. 本書第二部の主要テーマは、キリスト教の伝統に基づいて自然神学を新たに展望することの必要性であった。キリスト教的な實在観は豊かな説明力を持っている。それによって、自然の秩序が神を指示する能力をもっていることと、キリスト教の立場から自然を眺め自然と出会う際の気づきと喜びを、「洗礼を施された想像力」⁽¹⁾が新しいレヴェルにおいて達成できること、これら二つの事柄が説明可能になる。本書は、キリスト教信仰の基

本主題を前提として、真理、美、善に対するその含意を探究することに着手する。

2. なぜ、真理、美、善なのか。

知覚のプロセスは、世界について思惟すること（あるいは「知ること」）、情動的な応答をすること、そして規範行為的に相互作用することを含んでいる。これら三つの知覚の局面ととくに共鳴する世界の三つの局面が、それぞれ、真理、美、善なのである。

3. これは次のことを示唆している。すなわち、真理、美、そして善の三つ組み——これらには、この文脈においてすでに長く使用されてきた歴史が存在している⁽²⁾——は、自然に対して神学的に組織だった関与を行うための有用な枠組みを構成すると言えよう。

(2) 自然神学の射程

4. ウィリアム・ペイリーにとって、自然神学とは本質的に自然観察についての知的分析であった。

本書の根本的主張は、神を開示する自然の能力も、自然を照らす神の自己開示の能力も、これらが理解可能なものとなるのは、単に命題的信念によってではないということである。

5. 人間性の内部にはその深みに、事物を理解し、生命の組織内にパターンを見いだそうとのあこがれが存在している。

自然神学は、それ独特のアプローチを採用してはいるものの、理解するというこの一般的な人間の企てに属している。

6. 人間の知覚は、意義という事柄に関わっている。それは、身体的な生き残りという観点からの意義であることはもちろん、さらに、生における意味、人格的同一性、価値を確立することを通して、心理的に生き残るといった観点からの意義でもある。⁽⁶⁾ それにもかかわらず、啓蒙主義の残存する影響によって、しばしば自然神学は、知的見解の一種として単純に概念化されることになった。これに反論して、われわれは、自然神学が、「さめた考察」というよりむしろ「熱い知覚」という観点から理解されるべきであると主張する。

7. 自然を神の被造物として知解可能にする枠組みを提供。

これによって、われわれは、宇宙における自分の位置を理解するためにこの根本的なスキーマが有する含意と、環境に対する自分の責任とそれによって帰結する適切な行為や態度とを判断するようになる。

8. 自然神学はまた、意義の問いに注意を向けるのである。

これらは価値についての問いであり、真理よりもむしろ、善の探究に関係していると見る方が適切だろう。

自然神学はしばしば「自然法」の範疇のもとで考察される諸問題を包括しなければならぬ。自然の領域内部における特定の行為の形式、生き方、あるいは倫理的態度を含むかどうかとの問いに、明らかに関わっている。

9. より広い人間の応答領域の観点から、自然神学を再考することの必要性。

超越的な経験

知的内容の観点からは適切な表現も伝達もできない性質をもつと考えられる。ウィリアム・ジェイムズ、ルドルフ・オットー

彼らが強く指示しているのは、これらの経験が「合理的な」ものを遙かに超えた魅力をもっていることなのである。

（3）啓蒙主義批判の系譜

10. ジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards、一七〇三～五八年) は、自然の合理的な評価を強調する啓蒙主義に応える論述の中で、被造物の内に神の美を見分けることの重要性と合理的な分析によって人を回心させることの不可能性を強調している。エドワーズの考えによれば、回心とは「神的な事物の美と栄光を理解すること」⁽¹⁴⁾ に依存した一つのプロセスなのである。

11. ロマン主義の台頭は、啓蒙主義と結びついた自然への美的また情動的には薄められた応答に対する文化的反発という一面ももっていた。それゆえに、ジョン・キーツの複雑な詩「レイミア」(一八二〇年) は自然の驚異を合理的に説明することに対する抗議と部分的には解することができる。

キーツの見解によれば、自然は人間から情動的かつ知的な応答を引き出す。この情動的で知的な応答は、事物を理解しようとする欲望を含むとともに、それを超えて、畏怖、賞賛、上昇、恐怖といった経験へ広がって行く。

12. 「畏怖」を規定することは容易ではないが、特定の現象についての崇高で神秘的な感覚と考えてよいだろう。「畏怖」の概念は、人間の自然との関わりをめぐる宗教学的、社会学的、心理学的な説明を、顕著な仕方の特徴付けている。

13. 自然神学はさらに豊かで包括的な自然的秩序に対する人間の応答の範囲を表現できるということなのである。ここで、合理的な説明は、神の創造の現前に直面した畏怖の感覚に応じる崇拝と礼拝によって補完されねばならない。

第三部では、知的、情動的、規範行為的といったすべてのレベルにおける自然との関わり合いを考慮に入れた自然神学へのキリスト教的アプローチに着手する。

キリスト教に対する最近の無神論的批判との関わり。

（4）自然への包括的アプローチと無神論への応答

14. 反宗教的論客であるリチャード・ドーキンス

宇宙は真に神秘的で偉大で美しく、畏怖の念を抱かせる。宗教的な人々が伝統的に抱くたぐいの宇宙の見方は、宇宙の現実のあり方に比べれば、つまらなく、哀れでつたないものがあった。組織された宗教が提示する宇宙は、みすばらしい小さいな中世の宇宙であり、極度に限定されたものである。

15. ドーキンスの批判は、見当違いの誤解に基づいたものではあるが、それによって自然界への包括的なキリスト教的アプローチの必要性がいつそう重要で緊急のものになる。

（5）キリスト教自然神学の伝統とその再建

16. 真理、美、善という概念的に相互に連結された諸観念が、啓蒙主義に先立つキリスト教神学において、古代にその起源をもつ。

中世盛期には、「知性的美」という考えがキリスト教的な実在観の重要な局面を表現する仕方であると見なされていた。創造の神学は、ウンベルト・エーコが「宇宙についての一切善性的見方 (pancalistic vision)」と名付けたものを基礎づけており、またこの宇宙観は、この発展的な時代を特徴付ける「知性的美の感覚」を根拠としている。合理性、美、そして善はそれぞれが同一の創造者の諸様相であって、神の被造物の中に反映され、時にはおぼろげであるとしても、人間によって識別されるのである。

T.S.エリオット (T.S. Eliot、一八八八～一九六五年)

17. 一八世紀を通して、真理、美、善を結びつける作業は、ロマン主義の勃興と関連しており、それは自然へのあまりにも合理主義的なアプローチに対するその不満をはっきりと表現するのに有益であった。

18. これらの広大な領域に踏み込む程度のもにとどまることになる。それが、さらなる討論と探究のための問いかけとなり、自然神学を回復し発展させるのに有益で拡大された枠組みを示すものとなることを、わたしは希望している。

19. この構想がこれらの諸観念に一定の概念的安定を与える神学的枠組みを提供する。

「救済の経綸」というきわめて重要な考えは、世界には明らかに部分的な非合理性、醜さ、悪が存在しており、また世界の合理性、美、善について知られうるものに対して人間が適切な応答に失敗しているということについて、少なくとも説明の一端を提供するのである。

20. このことの重要性については、一八八四年に発表されたジョン・ラスキンの幾分憂鬱な講演「一九世紀の嵐雲（凶兆）」から知ることができる。

21. ラスキンにとって、人類は宇宙の中における自らの場所の感覚をまったく失ってしまった。

22. キリスト教自然神学の不可欠の部分となす創造の回復された存在論は、ラスキンの表現を用いるならば、われわれが、「石のために石を、雲のために雲を愛する」⁽²⁸⁾ ことを可能にする。なぜならば、まさに、それらはまず存在し、次に重要なものであると理解されるからである。こうしてキリスト教自然神学は、この場所と位置についての感覚を取り戻し、自然をこの豊かに織り込まれ調節されたあり方において見る可能性を開く。